

とうげい
陶芸 保持者 前田昭博 説明資料

1	無形文化財の名称	陶芸
2	無形文化財の保持者	(1) 氏名 前田 昭博 <まえた あきひろ> (2) 住所 鳥取市河原町本鹿 (3) 特徴 1 白磁を主とする陶芸の技術に習熟し、光と影の造形などと評される芸術上特に価値の高い製作を行っている。 2 磁器ならではの造形、表現を模索する創作姿勢は工芸史上において重要な位置を占めている。
3	指定・認定年月日	平成24年2月24日

<文化財の説明>

陶芸とは、陶土あるいは磁土を主原料とし、窯で焼成して、いわゆる陶磁器を作る技術の総称である。主原料の配分、轆轤や手びねりなどの成形方法、焼成方法、釉薬や絵付けなどの加飾技法などにより分類された、様々な種類の陶磁器が作られている。材質から、陶土を主原料とする陶器、磁土を主原料とする磁器に分類される。また、志野、備前焼、常滑焼など産地による分類がよく知られる。

鳥取県内においては、現在陶磁器を手がける窯元は30軒近く存在している。そのなかには、昭和初期に柳宗悦や吉田璋也によって展開された民藝運動の影響を受けた窯元が多くあるほか、鳥取藩の御用窯として栄えた因久山焼など江戸時代に遡る伝統的な窯元もある。また、これらに分類されない、鳥取県という自然豊かな土地を背景に個性豊かな作品作りを行っている窯元も存在している。前田昭博氏の白磁は、こうした創作活動のなかで特に高い評価を得ている。

前田氏は、1954年、鳥取県八頭郡河原町（現・鳥取市）に生まれた。付近には吉田璋也が再興したことので有名な牛ノ戸窯や中井窯などがある。1973年に大阪芸術大学工芸学科に入学し、陶芸を専攻した。在学中、白一色という制限されたなかにも豊かな表現を秘める白磁の可能性に着目し、白磁の制作に専念するようになる。卒業後はすぐに郷里に戻り、磁器産地でなく指導者もいないなか、磁器の表現を追求している。

白磁とは、陶石や磁土を主原料として成形し、その上に長石、石灰等に木灰を調合した透明釉を掛けて焼成する伝統的な陶芸技法のことで、その作品は陶器に対して磁器と呼ばれる。工程は一般に、胎土の調合、轆轤または型打ちによる素地の成形・仕上げの後、素焼、釉掛、本焼を経るもので、彫文様などの素地装飾や緑釉等が併用されることもある。

前田氏の白磁は、確かな轆轤技術による成形と、指先や手のひらで丹念に面取を施すこと

で生まれる稜線のフォルム、しっとり吸い付くような温かみのある釉調、そこに生じる光の陰影による空間美が特徴である。「光と影の造形」「用的立体」などと評されるその作品は、国内外で高い評価を受けており、芸術上特に価値が高いといえる。

作品の制作にあたっては、まず轆轤で最大限土を薄く延ばして筒状に挽き上げ、内から外へ膨らませて張りのあるかたちを作る。次いで、手と指の圧によって、内と外から押さえ、つぶし、面を作り出していき、乾いてから匏で削りをかけて手の痕跡を取り去る。この手法によって、形あるもので最低限の要素しか備わっていないことからくる、くつきりと強調されるアラトラインの美しさをより効果的に引き出すこととなる。この成形、乾燥、素焼きの後、長石や珪石、石灰石、カオリナイトなどさまざまな素材を調合した半透明の釉薬を掛け、本焼を行う。焼成温度は、通常の磁器より若干低い1280～1285度を最高温度とし、素地の白さを外へ伝えながらしっとりとした光を帯びる肌を生み出している。この光は、ものの陰影や輪郭までをも柔らかく見せる白とグレーの中間のような山陰の冬の光がイメージされており、前田氏は、こうした柔らかい質感を持つ作品を目指すことから、「磁」という漢字が持つ硬質なイメージに違和感を覚え、自身の作品に「白瓷<はくじ>」というタイトルを付けている。作品は壺を中心とするが、鉢や皿などさまざまな形態の器が制作されている。

また、磁土が陶土との違いを区別して、造形の素材として本格的に意識されるようになりはじめたのは1970年代後半にあたり、前田氏が白磁制作に専念しはじめるのと同時期である。磁土は扱いにくく、轆轤で土を延ばすことが容易にはできず、また力を加えずとると、乾燥中あるいは焼成中にひび割れる結果がもたらされる。つまり、磁土で造形することは、あたかも粒子の一つ一つを完璧に仕上げるような精密な造形が求められるという難しさがある。しかし、そうして作り出された輪郭線のきちんとしたフォルムは、ほかの素材にはない強みにし得る。

前田氏は、こうした磁器という制約を抱え込んだことが有利に作用するような表現を求める制作活動を行ってきた。これは、前田氏を含む戦後の磁器作家が、磁器ならではの造形、表現を模索してきた流れに位置づけられ、工芸史上においても重要な位置を占めるといえる。

前田氏は、日本陶芸展や日本伝統工芸展などさまざまな公募展に作品を発表しており、1993年の第48回新匠工芸会展で富本賞、2003年の第20回記念田部美術館大賞茶の湯の造形展で大賞、同年の第50回日本伝統工芸展で第50回展記念賞、2005年に第60回記念新匠工芸展で60回記念大賞を受賞している。また、日本工芸会理事、日本工芸会中国支部常任幹事などを務め、2010年の第57回日本伝統工芸展で鑑査委員を務めるなど、後進の指導・育成にも尽力している。

○指定基準（工芸技術関係）

陶芸、染織、漆芸、金工その他の工芸技術のうち次の各号の一に該当するもの

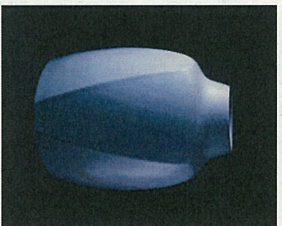
- (1) 芸術上特に価値の高いもの
- (2) 工芸史上特に重要な地位を占めるもの

○保持者の基準（工芸技術関係）

- 1 無形文化財に指定される工芸技術を高度に体得している者

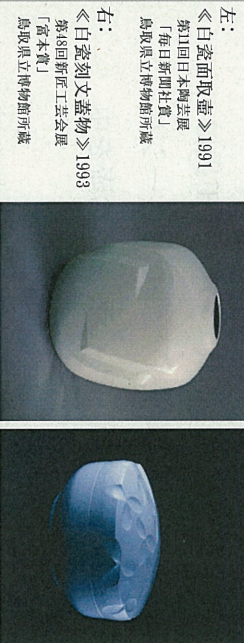
略 歴

1954年 鳥取県八頭郡河原町（現鳥取市）に生まれる
 1977年 大阪芸術大学芸術学部工芸学科陶芸専攻卒業
 1979年 第5回日本陶芸展初入選



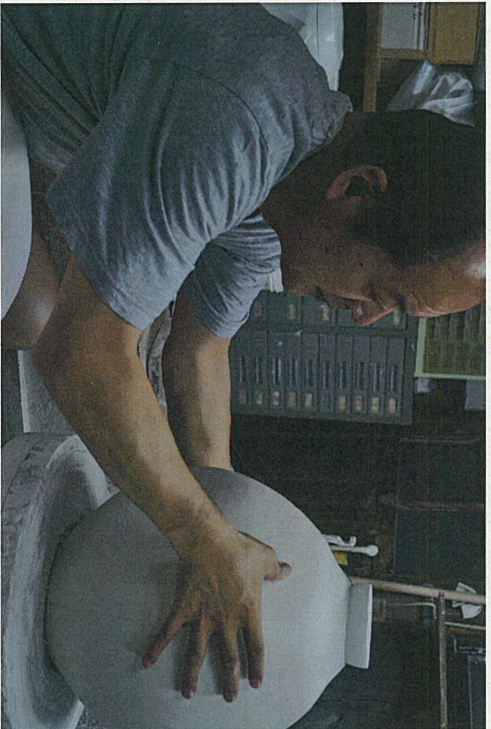
《白瓷面取壺》1979
 第5回日本陶芸展初入選
 鳥取県立博物館所蔵

1983年 第30回日本伝統工芸展初入選
 1991年 第11回日本陶芸展「毎日新聞社賞」受賞
 1993年 第48回新匠工芸会展「富本賞」受賞



左：
 《白瓷面取壺》1991
 第11回日本陶芸展「毎日新聞社賞」受賞
 鳥取県立博物館所蔵

右：
 《白瓷刻文蓋物》1993
 第48回新匠工芸会展「富本賞」受賞
 鳥取県立博物館所蔵



白磁の制作～成形（面取）～

白磁で面を作り出す場合、ある程度乾燥させてから削り出すことが多い。しかし、削って形を作り出す場合は、必然的にかなり厚く構築しておかなくてはならない。

しかし前田氏は、最大限土を薄く延ばして、できるだけ豊かな彫らみを持った形を獲得しようとするため、削りではなく専ら手と指の圧によって面を取ることとなる。

ろくろで構築し終わった時点の作品は、まだかなり水分を含んでおり、あたかもゴムまりのように指で押すとへこみ、指を引くと元に戻る。そういう時点で、500から1000回も、内と外から削きえ、つぶし、面を作り出していくのである。

1994年 第37回日本工芸会中国支部展「金重陶陽賞」受賞
 1997年 第10回MOA岡田茂吉賞展「優秀賞」受賞
 1999年 鳥取市文化賞受賞
 2000年 第47回日本伝統工芸展「朝日新聞社賞」受賞
 2003年 第20回記念田部美術館大賞「茶の湯の造形展」大賞受賞

第2回京畿道世界陶磁ビエンナーレ銅賞受賞
 第50回日本伝統工芸展「第50回展記念賞」受賞



《白瓷面取鉢》2003
 第50回日本伝統工芸展「第50回展記念賞」受賞
 鳥取県立博物館所蔵

2004年 2003年度日本陶磁協会賞受賞
 2005年 第60回記念新匠工芸展「60回記念大賞」受賞
 2007年 紫綬褒章受章
 2009年 鳥取県立博物館企画展「前田昭博 白瓷の造形」
 2010年 鳥取県文化功労賞受賞



白磁の制作～成形（面取）～

土づくりにから手と指の圧による面取までは、3、4日程度で早めに行う。その後、乾燥させてから、手の痕跡を消し、面を取った線のエッジを際立たせる削りの作業に入る。

白磁は、白一色であるが故に、かえって陰影がはつきり出る。そうした「光と影が織り成す造形」を前田氏は白磁表現に求めてきた。

肌には痕跡があったり、波打っていると陰影が乱れてしまう。そのため、入念な削りによって夾雑物を取り除く。すると磁器という材質が持つ特徴が、ぐっと強く出てくるという。



白磁の制作～胎土づくり～

「土もの」と呼ばれる陶器に対して、「石もの」と呼ばれる磁器は、ガラス成分が多く含まれた陶石や磁土を原料としている。日本では、熊本県の天草陶石、愛媛県の砥部陶石などの産地がよく知られているが、産地によって成分が異なる。

前田氏の場合は、当初兵庫県の出石の陶石だけを使っていたが、その後天草の陶石をブレンドし始め、最終的に天草陶石だけを用いるようになった。

実験を重ね、素地づくりと焼成の温度設定と釉薬の関係を体得し、想定した仕上がりに近づけることができるようになってきたのは1980年代の後半のことだったという。

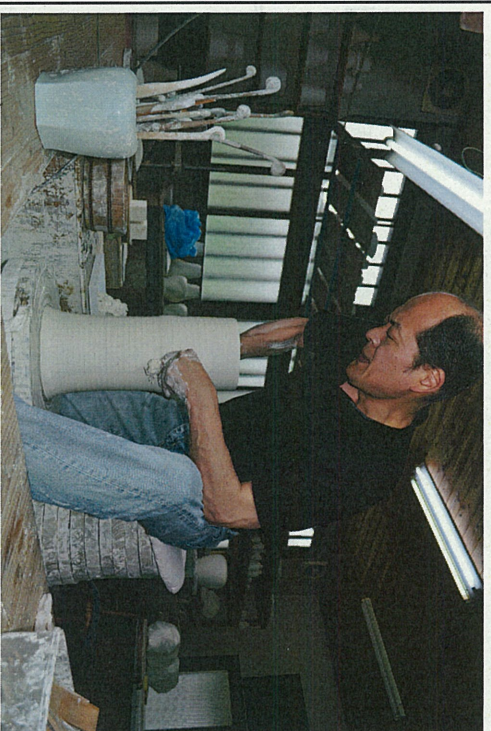


白磁の制作～施釉・本焼～

成形、乾燥、素焼きの後、長石や珪石、石灰石、カオリナイトなど様々な素材を調合した半透明の釉薬を掛け、本焼を行う。焼成温度は、通常の磁器より若干低い1280～1285度を最高温度とする。

これにより、素地の白さを外へ伝えながらしっとりとした光を帯びる肌を生み出している。この光は、ものの陰影や輪郭までも柔らかく見せる白とグレーの中間のような山陰の冬の光がイメージされている。

前田氏は、こうした柔らかい質感を持つ作品を目指すことから、「磁」という漢字が持つ硬質なイメージに違和感を覚え自身の作品に「白瓷」というタイトルを付けている。



白磁の制作～成形（轆轤）～

まず轆轤で基本となるボディーを立ち上げる。壺の場合、最大限土を薄く延ばして筒状に抜き上げ、内から外へ彫らませて張りのあるかたちを作っていく。

手の感覚を研ぎ澄ませ、均一に力を入れながら延ばしていく。壺の内側を整えながら延ばすのには、数種類のコテ、桐コテ、ヘラなどを使い分ける。

一般に磁土は抜いにくいと言われる。轆轤で土を延ばす際は、均一に力をかけなければならない。また力を加えすぎると、その影響が修正したつもりでも残っていて、乾燥中あるいは焼成中にひび割れる結果がもたらされるといふ。

鳥取県指定無形文化財保持者・保持団体一覧

文化財の名称	保持者・保持団体	特徴
因州佐治 紙つまた	因州車切れず 紙保存会	原料はかつまたのみであること。 伝統的の製法と製紙用具によること。 1 なせ紙作業を行い、煮染には草木灰、ソーダ灰またはこれに類するものを使用すること。 2 原料を紙料に蒸肌しないこと。 3 明解は手打ちまたはおおいを用いた、竹藪による流漉きであること。 4 抄造はわらじとろろあおいを用い、竹藪による流漉きであること。 5 板干しまたは蒸紙による乾燥であること。 6 束包する場合は、植物染料を使用すること。 三 伝統的の因州産の包紙、地合等の特質を保持すること。
因州山根 手漉き和紙屏	因州山根情報 研究会	原料はこそのみであること。 1 なせ紙作業を行い、煮染には草木灰、ソーダ灰またはこれに類するものを使用すること。 2 原料を紙料に蒸肌しないこと。 3 明解は手打ちで行うこと。 4 抄造はわらじとろろあおいを用い、竹藪による流漉きであること。 5 板干しまたは蒸紙による乾燥であること。 6 束包する場合は、植物染料を使用すること。 三 伝統的の因州産の包紙、地合等の特質を保持すること。
弓張紙	弓張紙保存会	手つひき糸を使用すること。 天然紙で染めること。 三 くの工程は、「手くろ」であること 四 手技術による乾燥であること
木工芸	若衝定治 森脇信夫	一 職上の伝統的木工技術である木地ろろの技術に習熟し、素材の知識と適切な材料に高度な技術を体得すること。 二 素材や木目の美しさを最大限に引き出す制作を行うこと。 1 木工芸の技法のうち、指物・埴物・刺物・木象嵌のうちの技法について、正しく深い技術を習得していること。 2 木地を指物によって組み合わせ、それを緻密な縫合技法により、芸術上特に繊細な肌調い制作を行っていること。
織	知井貞子 嶋田悦子	織の技術に習熟し、伝統的な素材及び技法を用い、高度な技術を体得すること。 1 白磁を主とする陶芸の技術に習熟し、光と影の造形など派手な装飾上特に極上の高い制作を行っていること。 2 磁器ならではの造形、表現を構築する創作姿勢は工芸史上において重要な位置を占めていること。
陶芸	前田昭博	